

日本語・日本語教育学部会

【概要】

鄭 在喜・河野 礼実*

日本語・日本語教育学部会は、12月16日午後12時30分から16時20分まで文教育学部1号館1階大会議室にて行われた。

本部会においては、前半は大学教員3名によるご発表と、後半は大学院生5名による研究発表が行われた。以下、それぞれの発表内容をまとめ、報告する。

1. 譙燕（北京外国語大学教授）

「グローバル化時代における日中語彙交流－中国語に見られる日本語由来の新語を中心に－」

譙燕先生のご発表は、日本語由来の新語がいつ中国の新聞に現れたのか、またその意味・用法に異同があるのかを明らかにすることを目的とするものであった。その検討方法としては、中国語の新聞コーパス『読秀知識庫』から日本語由来の新語を抽出した後、その意味を辞書などで確認、そして、コーパスから用例を抽出し、検討を加える方法であった。なお、その具体的な例として「完勝」、「人気」、「御宅族」、「熟女」を挙げられ、中国語との意味・用法の異同について述べられた。最後に、1980年代以降、中国語が多くの日本語から借用されていることに対し、その原因として内的原因と外的原因の両方で考えられていたが、内的原因は情報伝達のため、そして、外的原因は日本との文化交流が発展しているためであると述べられた。（鄭）

2. 施建軍（北京外国語大学教授）

「中日韓三カ国言語の漢字言語比較研究の課題について」

施先生のご発表は、中日韓三カ国の言語にある漢字語を研究するに当たってどのような研究課題が考えられるかについてのものであった。まず、漢字語に関する国内外の研究状況として、共時的な立場に立ってアジア諸国に置ける漢字語の使用にフォーカスを当てた体系的な研究が少ない点、言語生活に使われている言語事実を対象にしたダイナミックな調査が少ない点、そして、中日韓など三カ国の言語における漢字語の体系を対象にした言語対照研究が少ない点を挙げられた。なお、現在、取り組まれているプロジェクトを紹介し、中日韓の言語における漢字語の使用に関する研究として、以下の4つのアウトラインをご提示された。

- ① 漢字語使用に関する諸国の言語政策
- ② 計算機ソフトツール研究開発
- ③ 韓国語における漢字語の研究
- ④ 日本語における漢字語の研究

研究方法としては、コーパス言語学や統計学、大型データベース技術を導入するとし、数学の統計モデルを導入して漢字語を特定することや、コーパス言語学の手法を導入して同形語の意味用法を比較研究することなどから、オリジナリティが予想できると述べられた。（鄭）

*お茶の水女子大学大学院院生

3. 金榮敏（同徳女子大学校副教授）

「韓国における日本語学・日本語教育の現状と展望」

金先生のご発表は、韓国における日本語学と日本語教育の現在を認識し、これから進むべき方向を探ることを目的としたものであった。具体的には、多様な統計資料をご提示され、現在韓国で急激にその重要者が増加している中国語との比較を通して、韓国国内における日本語の需要の変化、また、学齢人口の減少に伴う大学構造改革などについて述べられた。最後に、韓国における日本語学・日本語教育の課題として、研究者同士の交流の増大、日本語需要者のニーズを具体的に把握することの必要性、なお、それに応じたカリキュラムの見直し、新しい教授法・教材の開発などを進めるべきであると述べられた。さらに、日本語教育アーティキュレーションの達成のための協力体制の完備も必要であると語られた。（鄭）

4. 江宛軒（台湾大学院生）

「存在様態のシテイルについて一格体制の変更から」

江さんは、「池に鯉が泳いでいる」のような「格体制を変更させている～テイル」文について、存在様態を表すシテイル文における静止的な側面、そして二格名詞とガ格名詞の制約の観点から分析した結果を発表された。分析の結果、格体制の変更現象が起きる際には、（1）話し手は文全体を「静止的事態」として捉えられること、（2）二格は存在場所を表し、その二格によって「存在様態を表すシテイル文」の存在という「静止面」が引き出されること、そしてシテイル形式で主体の様態を表すこと、（3）場所を表す二格名詞はガ格名詞のものが普通に存在できる場所であること、以上の3つの条件が不可欠であるということが明らかになったと報告された。

質疑応答では、「最近の使用例はあるのか」「特殊な場面でのみ見られるものなのか」などの質問があがった。発表者の江さんは、格体制の変更が生じる文、動詞、名詞には制限が見られるという仮説があるが、その制限について今後さらに実例を集め、検討していきたいと述べられた。（河野）

5. 劉賢（北京外国語大学院生）

「中国大学日本語専攻用の教科書における使役表現の扱いについて一学習者の産出例との関連をめぐって一」

劉さんは、従来の学習者による使役の産出例に関する研究における問題点を指摘した上で、現在中国の大学で使用されている日本語専攻学習者用の教科書に見られる使役表現の扱いの一般的な傾向と、その妥当性について発表された。学習者コーパス、母語話者コーパス、教科書の3つを資料に分析を行った結果から、教科書で扱う使役表現の提示例文、場面設定、文法記述に関する提言がなされた。教科書の例文の多くは単文か文末言い切りであったが、その一方で母語話者コーパスには単文や文末言い切りの使役表現例が少なかったことから、既習項目と関連させたさまざまな例文提示が必要であること、また文法記述をする際には、学習者の理解を促すために、母語との違いに気づかせるような関連情報も必要であることなどが指摘された。（河野）

6. チョン・ミリョン（同徳女子大学校院生）

「判断のモダリティ表現について一「と見える」を中心に一」

鄭さんの発表は、「と見える」を判断のモダリティとして、その意味を考察したものであった。鄭さんは、モダリティ表現としての「と見える」構文は、話し手が判断内容を視覚化して提示するものであり、話し手の主観性が強いという特徴を

持つと説明された。また、「と見える」と「と見られる」「模様だ」の比較を通じて、「と見える」はもっぱら話者の判断を表すという特性から、報道文テキストには使用されず、小説の地の文や会話文、紀行文などで多く使用されていると指摘された。さらには、「と見える」にそれぞれ「か」「もの」が前接した「かと見える」「ものと見える」についても、「かと見える」は不確かさを表す「か」により「と見える」構文に比ベモダリティ的働きは弱くなり、「ものと見える」は「もの」が付くことにより、より一般的な判断であるということを表すようになると指摘し、「と見える」との意味の違いを明らかにされた。(河野)

7. 曹ナレ (お茶の水女子大学院生)

「日本語教育に役立つ多義記述のための一考察 - テクルを例に - 」

曹さんの発表は、補助動詞テクルを対象項目とし、その表現独自の意味を厳密に記述し、多義語の意味を学習者に効果的に提示する方法について考察を行ったものであった。研究方法としては、認知意味論的観点による多義の記述として、テクルのプロトタイプの認定、意味間の関係の提示、多義構造の提示する方法を用いていた。なお、学習支援のための考察として、語彙指導における留意点を挙げていたが、母語訳の提示、意味の説明、例文の提示などが考えられると述べた。最後に、課題点として、多義語の意味の相互関係を捉える考え方の提示、また、他の多義語においても似たような機能を持つ語との意味境界をどう説明したほうがいいのかについて更なる検討が必要であると挙げていた。(鄭)

8. 石井久美子 (お茶の水女子大学院生)

「大正時代の外来語—固有名詞混種語を中心として—」

石井さんは、外来語研究といえば、明治期や昭和期を対象としたものが多く、大正期の外来語研究はいまだ十分に行われていないということを経験に、大正期に出された『中央公論』の「公論」記事群を資料として用い、大正期の外来語、特に固有名詞の地名と人名についての調査結果を発表された。地名、人名ともに、混種語が見られ、その中には「獨逸魂」や「シャイロツクの貧(ママ)慾」のように一般名詞化しているものや、「亞米利加化す」のように動詞の一部となっているものも見られた。混種語は、最も日本語化されていることを証明する要素の一つであると考えられ、品詞や意味領域を変えて使用の幅を広げることになる。それは、情報の付加である一方で、固有名詞の持つイメージの固定化につながっていくことを「英國紳士」「コペルニクスの變革」「カイゼル鬚」を例に説明された。(河野)

以上、日本語・日本語教育学部会における3名の先生方によるグローバル化と日本学をテーマとしたご講演、5名の大学院生による研究発表についてまとめた。異なる背景を持った人たちが集まり、研究を通して交流が行われた非常に有意義な会であった。今後も分野、機関、国を超えた交流が期待される。